

社会的孤立を防ぐ誰もが利用できる場づくりに 関する考察

ーコミュニティカフェ H の実践からー

島田 響

本研究は、京都市にある「コミュニティカフェ H(以下 H)」に注目し、そこで、いかにして誰もが利用できる場が生み出され、背景が異なる多様な人々が結びつき、支え合う関係が構築されているのかという点について、参与観察やインタビュー、Hが発行したニュースレターといった文献資料の分析を通して明らかにした。

序章では、先行研究の整理を行い、特定の空間における人やモノが創り出す関係性の力である「『場』の力」や社会的孤立に対応するために問題解決よりもつながり続けることを重視する「伴走型支援」といった概念が、Hの実践を理解するうえで重要であることを確認した。

第1章では、Hやその活動メンバー、活動内容、利用客の概要と本研究における調査概要を示した。

第2章では、Hの日常風景から、Hがどのような場を目指し、どのような場を創り出しているのか。そして創り出された場がどのような影響を持ちうるのかについて考察を行った。Hでは一般的なカフェとは異なり、必ずしも利益を出すことや飲食を提供することに主眼があるわけではなく、本論中で取り上げた、店に難癖をつけたり大きな声で独り言を話したりするQさんのような、一見迷惑そうに見える人をも含む、誰もがありのまま過ごすことができる場を創ることが目指されていた。こうしたことから、Hの日常の中には雑多性があることが確認されるとともに、そうした雑多性が「場」の力として発揮され、誰もがいることができる場が実現されている可能性が見いだされた。また、スタッフにも自分のペースで利用客と接する緩やかさが認められていたことで、「緩やかな秩序のある場」が形成されていると考えられた。さらに、こうした「場」において、スタッフや利用客が時間を共有することでQさんのような理解しがたく思える人に対する評価が変容する様子も見られた。

第3章では、Hで行われている「こどもクラブ」という活動を事例に、Hが実践の中で、どのように利用者のニーズに即した場の作り替えを行ってきたのか、そして利用者のニーズに対して寄り添う姿勢を取ってきたのかという点について考察を行った。その結果、Hでは、場の開放性と限定性を使い分ける実践が行われていた。具体的には、フィリピンにルーツのある子どものために生み出した「こどもクラブ」という限定的な場を、利用する子どもの状況に応じて、誰もが利用できる開放的な場へと変容させつつも、特別なニーズのある子どもに対しては限定的な場も維持するという実践が行われていた。さらに、「こどもクラブ」に関わるスタッフやボランティアが「見守り」というアプローチを取り、子どもに寄り添い続けようとするあり方が見られた。また、「見守り」を行ううえでは、スタッフやボランティア間のミーティングやSNSグループを通じて行われる情報共有が「見守り」のための視点を提供するという役割を担っていることが分かった。このような「見守り」というアプローチは「伴走型支援」の考え方と通じるものとして考えられ、Hの他の実践の中でも意識されていると言えるアプローチであった。

第4章では、Hで行われる生活困窮者支援事業を事例に、Hがどのようにして生活困窮者や外国籍住民といった人々とのつながりを生みだし、維持しようとしてきたのかについて考察した。まず、この実践の中でも、上記の「こどもクラブ」で見られたような、「見守り」の意識が観察され、些細な日常会話や生活状況の把握から、この生活支援事業に留まらない関係を構築していくことが目指されていた。また、この実践にも「場」の力が活かされていることが推察され、福祉の専門家的なアプローチから必ずしもそうとはいえないアプローチまで、各スタッフやボランティアのそれぞれの方法による利用者へのアプローチやカフェの場における偶発的な会話が、つながりの創出や維持に寄与している可能性が示唆された。

終章では、第2章から第4章までの分析で得ることができたHの実践に関する知見を再度整理した。さらに、Hを利用する人が実際にどのようにHの場を捉えているのかという点とHが地域社会に対していかなる役割を果たしているのかという点を本研究に残された課題として挙げた。

本研究は、カフェ事業として国籍や心身の状態が異なる人のように多様な人が利用する場を創り出しながら、外国にルーツをもつ子どもたちのための学習支援や生活困窮者に対する支援を行ってきたHの実践の分析を行い、誰もが利用できる居場所であり、多様な人々がその属性に関わりなくお互いに交流し支え合う場となるコミュニティカフェの一事例を示したという点で意義があると考えられる。